

俳句：文苑

著者	双松，南斗，紫水，藤坊，百日紅，呼雲，紫村，雨城，松村
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 3
ページ	4 7 - 5 0
発行年	1902-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/5352

雜吟

雨、過、池、亭、春、暮、時、聽杜鵑水、邊、翠、柳、任、風、吹、夜、來、聞、得、啼、鵑、急、吉田紫陽不、是、羈、人、多、所、思、

雲、擁、羊、腸、路、題山水畫水、流、奇、石、間、空、亭、人、不、到、唯、有、暮、禽、還、

石、徑、蕭、條、也、可、憐、懷古聽、他、古、木、咽、寒、蟬、英、雄、一、去、干、戈、絕、落、日、依、微、意、恨、然、

水、聲、微、響、野、橋、斜、夜歸翠、柳、垂、邊、是、我、家、此、際、閑、情、先、領、略、一、痕、新、月、照、平、沙、

人、世、送、迎、真、可、憐、送別一、逢、一、別、亦、因、緣、祇、今、今、袂、意、難、盡、再、會、期、君、何、處、邊、

落合先生批

俳句

松村松村去つて大學に遊ばんとす六月四日同人
相會して之を送る
同人多く言ふを欲せず君たゞ健なれ
(雨城)



冷酒の君を送るや初胡瓜
行かばきけ根岸の里の子規
君を送る南山樓の青葉かな
君曰々筑波嵐の涼しさよ
双松
南斗
紫水
藤坊

同

蚊遣火や明日の空見る宵の雲
 椽に出て行燈を張る蚊の夕
 蚊を叩く團扇の音や椽のやみ
 我宿は蚊遣も焚かず蚊食鳥
 叢に小便すれば蚊の聲す
 蚊柱の橋を上下に分れけり
 草にとまる螢をとるや草ながら
 わくれたる人まつ蔭の清水かな
 山茶屋の裏戸へ廻る清水かな
 話しつゝ猫の蚤とる女かな
 ロビンソンの晝寐をれこそ鸚鵡かな
 洗髪を手に束ねたる浴衣かな
 花桐の書院に近く詣かな
 虫干の本を枕に晝寐かな
 十反の帆をまき下す雲の峯
 大江の水呑まんとす雲の峯
 蚊帳に入りて義太夫なる男かな
 鮎鮎に膳睦々や夫婦者
 早鮎を呉れし隣や京の人
 傾城の老いては鮎をひさぎけり

同
 南斗
 百日紅

きれぐに山をはなるゝ夏の雲
 金屏に牡丹紅を吐かんとす
 青竹に牡丹をかこむ小庭かな
 子々の何憤るその振りど
 行水や盟に動く雲の峯
 涼しさや日は入りはてゝ沖の島
 水打てば芭蕉に沁る玉雫
 夏草や朝風渡る河の堤
 ゆあみして椽に髻剃る青葉かな
 大の字や十の字になりて晝寢哉
 夕立の片側晴れて鎮守森
 雷や椽に佇む晝寢起
 算して脊戸に引きたる清水哉
 神さびし石の祠や苔清水
 筍の伸びて鶯老いにけり
 舟遊柳の岸につなぎけり
 別荘の裏をこぎ出す舟遊
 舟遊酒つきなんとして月高し
 舟遊玄耳笛吹く舳かな
 三百の羅漢古りけり苔の花

同
 紫村
 呼雲
 雨城

泉水に青梅落ちて幾日かな
河原遠く茨の花や雲の峯
翡翠や水の涸れたる石の上

同 同 同

葉柳や看板太き本通り
葉柳や玉輦過ぐる二重橋
釣橋の寫真うつすや夏柳

同 同 同

雜 録

光の子、詩的神話に見えたる三躰の空中女神

風神化生の神話……神名の解釋、御柱の意義……神の氣息即ち風……龍田風神……龍田姫、秋の神紅葉を司る神として……詩的神話……龍田姫と太陽との關係……竜田姫と佐保山姫との比較……二神の類似と其天然的基礎……佐保山姫と赫夜姫との類似……支那思想の影響……赫夜姫は月の子なり、佐保山姫は日の子なり……諸曲佐保山の徴證……諸曲文學の大欠點……春の霞の人格化の他の一例

教 授 高 木 敏 雄

先づ、風神に就て、一言を費すを要す。風の神に關しては、古事記は、その化生の神話を傳へざるも、其他の原泉徴證は、伊弉諾尊の御氣息より、此神の化生し給ひしを説く。古史成文は、凡ての源泉徴證を比較し、綜合して、記して曰く、

爾に、神伊邪那岐、伊邪那美命、妹妹二柱、嫁ぎ給ひて、國の八十國、島の八十島を生み竟へ、